

宮本民俗学に共鳴する社会経済史

いたがき たかし
板垣 貴志

日本史分野において、富の象徴となっていた土地の慣行に注目が集まり研究が集中するのは当たり前であろう。しかし、生前の網野善彦がくり返し唱えたように、百姓は土地からの生産物のみで生活していたわけではない。

そもそも家畜は、自身増殖もする特殊で高価な動産で、それは、Capital(資本)とCattle(家畜)が関連語であることや、「畜」と「蓄」は同義語であることなど、指示する言葉からも明らかである。本来、家畜は洋の東西を問わず富としての性格を持ちあわせており、あえて換言するならば、「家の蓄え」であった。

従来の日本史分野では、家畜を耕耘、運搬といった《労働手段》としてのみ捉え語られてきた。しかし、家畜はその存在自体が、富としての側面も有しており、《蓄財手段》《金融手段》などとして独自の歴史的役割を果たしていたのである。土地などの不動産だけでなく、家畜のような動産を視野に入れることにより、日本農村社会の歴史的展開を再構築することができると考えている。

このほど上梓する『牛と農村の近代史——家畜預託慣行の研究——』は、私が学部の卒業論文から取り組んできたテーマを一書

に編んだものである。「家畜預託慣行」とは、家畜を預託・貸貸・共有する行為の総称で、本書では、このような慣行を取り結ぶ人と人との社会関係に着目した。内容は、家畜預託慣行の実態を実証的に明らかにし、それが取り結ぶ社会関係が近代日本農村において果たしていた歴史的意義を説いている。

列島社会でも前近代から家畜預託慣行は存在しており、一見すると前近代的なベールに包まれているような慣行が、近代日本の資本主義化の過程で改めて必要とされ飛躍的に拡大していった。それはなぜなのか。この疑問を明らかにしつつ、日本近代史のなかで忘れられた一面を描いたつもりである。

研究の基本史料となったのは、中国山地に多数存在していた牛持の経営帳簿である。この帳簿分析は非常に苦勞したことから、とても想い出深いものがある。経営帳簿は、備忘録程度の認識で粗雑に記される箇所も多く、定期的に収支決算しているわけではない。要するに、ぐちゃぐちゃなのである。私は分析を進めつつ、「牛持にとって牛の預託は果たして経営なのか」という疑問がいつも頭を巡っていた。今となつては公表すること自体がたいへん

恥ずかしい代物であるが、私の卒業論文のタイトルが、「近代出雲地方における鞍下牛慣行と役牛貸借経営」、修士論文が「牛親方経営にみる蓄財手段としての家畜所有」であった。牛の預託は、《経営》なのだという捉え方からなかなか自由になれなかった。

大学院生研究室で史料と毎日格闘しながら抱いた疑問が、やがて発想の大転換へとつながっていくこととなった。「これは経営ではなく農村社会の慣行だ」と。再度《慣行》という観点から帳簿を眺めまわすと、帳簿の記述の端々に今までまったく気付かなかった多くの発見があったのである。この発見には、興奮を抑えることができなかった。これこそ歴史研究の醍醐味なのであろう。博士論文のタイトルは「家畜預託慣行の史的研究」である。私は、修士論文から博士論文までのあいだに、《経営》から《慣行》へと発想の大転換を経験した。歴史研究は、時間をかけて史料と向き合うことが極めて重要なのだとつくづく感じる。

研究フィールドとした島根県出雲地方は、私が生まれ育った故郷でもある。故郷出雲の近代史といえ、地域の主要産業であった「たたら製鉄」の衰退による疲弊と苦難の歴史だったと思う。その後の近代化や現代化とともに発展から取り残され、今まさに急激な過疎化、高齢化も進展している地域である。本書では、地域の疲弊と苦難のなか、牛の生産育成を担うことを通して、地域社会の調和と共存のために努めた郷土の名もなき農民像が不十分ながらも描けたように思っている。

私は、民俗学者宮本常一に私淑し、その膨大な著作から多大な

影響を受けた。宮本常一の自叙伝的な著作『民俗学の旅』は、このような印象的な言葉で締め括られている。

進歩のかけで退歩しつつあるものを見定めてゆくことこそ、今われわれに課されているもつとも重要な課題ではないかと思う。(中略)多くの人がいま忘れ去ろうとしていることをもう一度掘りおこしてみたいのは、あるいはその中に重要な価値や意味が含まれておりはしないかと思うからである。しかもなお古いことを持ちこたえているのは主流を闊歩している人たちではなく、片隅で押しながれながら生活を守っている人たちに多い。

これは網野善彦が引用した言葉として、ご存じの方もおられるかも知れない。岩田重則は、近著にて宮本民俗学におけるクロボトキンの『相互扶助論』の受容を重視している(『宮本常一 逸脱の民俗学者』河出書房新社、二〇一三年)。競争と対立ではなく共同と調和による進歩。私の牛研究をまとめた本書に描いた歴史像は、ともすると牧歌的なものになっているかも知れない。批判は甘んじて受けるつもりである。しかし、なにも社会矛盾に覚醒した闘争だけが、時代と社会の推進力ではないように思う。着実に地に足をつけた人々による日々の営みの中にも、時代と社会を動かす芽はあるのではなからうか。私の感性は宮本民俗学に共鳴しつつ、それを社会経済史として表現したつもりである。

私自身も、調和と共存のために努力する人でありたい。

(神戸大学大学院人文学研究科特命講師)